

地域連携活動

宮崎大学農学部は大学と地域との連携を重視しています。積年の研究と教育で育んだ知見や技術を生かして地域の活性化に貢献する一方、自然豊かで農林水産業の盛んな宮崎に学んで研究や教育を発展させることを大事にしています。数多くの農学部の研究・教育が地域とつながりを持って行われているほか、農学部は地域の自治体や研究機関とも協定を結んで連携活動に取り組んでいます。



●地域の高校生や中学生を対象とした科学講座

農学部応用生物科学科や附属農業博物館などでは、科学教育の支援活動として、地域の高校生や中学生を対象とした科学講座（「ひらめき☆ときめきサイエンス」、「出前実験」など）を実施しています。

これらの講座では、人工甘味料はどれほど甘いのか、抗酸化活性とは何者か、豆乳はなぜ固まるのか、といった身近な疑問や土の粒子から環境の情報を引き出す方法など最新の科学について、実験を通して学んだり、体験したりすることを通して、次世代を担う中高生の科学へ興味関心を高めることを目的としています。

この活動は10年を超えており、講座を受講した生徒さんの中には、農学部をはじめ、本学の学生となった人もいます。



「農」のチカラで地域と連携を

●川南町特産ラズベリーブランドを作る!

農学部では暖地でも栽培できるラズベリーを育成するために、宮崎に自生しているナワシロイチゴとラズベリー栽培品種とを交配し、「07RUBIXP01」（登録番号第21801号）を育成しました。この品種は食味がよく、収量性が高く、無農薬栽培が可能です。卒業論文や修士論文を介して、地域の方々と共に、作出したラズベリー品種です。

平成28年度からは、宮崎県川南町や木村ファームの協力を得て、さらに美味しいラズベリーの品種改良や栽培試験を開始しました。川南町内に新たな研究圃場も造成しました。今回は、生食用だけでなく、川南町オリジナルのコンフィチュールやフルーツソースを作るのが目的です。ぜひ、一緒に研究に取り組み、宮崎大学から世界に向けて新たな研究成果を発信しましょう。



●フィールドセンター開放

地域の自然や農林水産業に触れることを目的に、農学部附属フィールド科学教育研究センターの各フィールド（木花・住吉・田野・延岡）を随時開放しています。

11月の大学祭に伴う「木花フィールド（農場）開放」、12月の「住吉フィールド（牧場）開放」は、生産した農産物や、「宮崎大学MILK」等の販売はもちろん、トラクター試乗やバター作り体験なども行われ、家族で楽しいひとときを過ごせる恒例のイベントとして、地域の方から親しまれています。



収穫体験

木工体験



魚とのふれあいタッチプール

仔牛との触れ合い

●海で育んだ巨大ヤマメ、みやざきサクラマス

農学部では、冬季にヤマメを海面養殖する技術開発に取り組んでいます。県北部の内湾で、五ヶ瀬産ヤマメを4か月余り海面養殖すると、冬季に淡水養殖したヤマメに比べ、体重が10倍近く増え、巨大化します。魚肉はほんのり桜色で、脂がのって美味しいと好評です。九州山系ヤマメの海面養殖技術の確立により、お刺身や加工商材の生産が期待され、宮崎県に新しい地域ブランド魚、「みやざきサクラマス」が誕生しました。みやざきサクラマスは、春以降は淡水養殖も可能で、秋には成熟し、大粒の黄金色のイクラがたくさん採れ、魚卵の生産性も飛躍的に増大します。今後、みやざきサクラマスの生産性を上げ、宮崎県産の美味しいサーモン魚肉やイクラが、家庭の食卓を賑やかにしてくれることが期待されています。



海面養殖風景



サクラマス刺身



成熟サクラマス



イクラ丼

●世界農業遺産地域を支える山腹用水路

宮崎県北西部の高千穂郷・椎葉山地域は、長期的経営である林業と毎年の収入源である農業とをうまく組み合わせた農林業複合システムによって、森林と農林業の調和のとれた社会を実現している素晴らしい地域として、2015年に世界食糧農業機関より世界農業遺産に認定されました。農学部では地域資源創成学部と連携して、この地域の林業、農業、文化等を深く調査してその価値を客観的に評価する研究に取り組んでいます。

なかでも、遠い山奥の水源から等高線に沿って流れながら地域の棚田を潤す山腹用水路に着目し、その地形的な特徴や、誕生の歴史などを一つ一つ深く調査し、いかに地域にとってなくてはならない存在なのかを地域の方々といっしょに水路を「さるき(歩き)」ながら共に探っています。

<http://www.agr.miyazaki-u.ac.jp/community/katsudou.html>



●畜産環境衛生の科学的支援 in 小林市

宮崎県は、2012年全国和牛能力共進会(5年に一度開催、別称和牛オリンピック)で2010年の口蹄疫被災を乗り越え、見事2連覇を達成しました。しかし、畜産農家の高齢化、後継者不足で牛の飼養戸数は年々減少し、子牛の生産数が激減し、畜産王国宮崎の危機的状況となっています。しかも、東アジア諸国では、依然、口蹄疫の発生が報告されており、油断できない現状です。

高齢者にとって、日常の消毒は大変な作業となっています。そこで、小林市は2011年に独自に農家巡回型の消毒サービス事業を立ち上げました。小林市と連携協定を結んだ農学部では、この事業をさらに発展させるために、科学的見地に基づいた、消毒効果の確認と改善を目的に牛舎環境内の微生物除去の検証を実施しています。これらのデータを解析し、さらに効果的な消毒資材や消毒方法を提案し、県内全体に普及させ、口蹄疫ウイルスの農場内侵入を防止するだけでなく、和牛増頭に貢献します。



煙霧消毒



消毒前



塗布後